

TTC ゆった〜り山行実施記録表 2019年11月24日 報告者: Y.M (1/4)

山行名	木曾馬籠宿〜馬籠峠越え〜妻籠宿／奈良井宿ウォーキング〔岐阜/長野県〕		
実施日	令和元年年 11月17日(日)〜18日(月) 1泊2日 公共交通機関利用		
天候/参加人員	天候: 晴れ レベル: ★ 参加者: 申込 10名/実施 9名(男 3名/女 6名)		
パーティスタッフ	省略		
参加メンバ	省略		
費用	<p>23,170円(交通費¥13,040+宿泊費¥8,500+入館料・通信費・カンパ金等¥1,630)</p> <p>一人;23,170円 (小田原起点/町田終点: JR ジパンクラブ 30% 割引利用; ただし、起点まで/終点から本厚木間の小田急線交通費は含まず)</p> <p>カンパ金 170円</p> <p>交通費: JR(ジパンクラブ 30%割引利用): ①乗車券(小田原発⇒中央細線・中央本線・横浜線経由⇒町田行)@7000、②小田原⇒名古屋新幹線特急座席指定券(30%引)@2,750、③名古屋⇒中津川特急座席指定券(乗継割引 50%引)@860、④塩尻⇒八王子特急座席指定券(30%引)@1560/JR 交通費合計(①〜④)¥12,170、現地支払バス料金 ⑤中津川⇒馬籠: ¥570、⑥妻籠⇒南木曾 ¥300/一人当交通費合計(JR+現地バス代)@13,040 /交通費総計: @13,040x9人⇒¥117,360</p> <p>宿泊代(民宿つたむらや)一人当り@8,500/宿泊代総計@8500x9人⇒¥76,500</p> <p>拝観料・その他費用: 馬籠藤村記念館入館料@500、妻籠博物館(脇本陣・資料館・本陣)入館料@700、奈良井宿上間屋見学料@300/入館料合計@1,500/入館料総計@1500x9人⇒¥13,500、通信費¥1,000/9人⇒一人当り@111</p> <p>集金¥208,530(@23,170x9人)ー総費用¥208,360(交通費@13,040+宿泊費@8,500+入館料@1500)x9+通信費¥1000=残金¥170(カンパ金)</p>		
所要時間	11/17(日) 馬籠バス亭→馬籠宿→馬籠峠→一石栃立場茶屋→男滝・女滝→大妻籠	11/18(月) 大妻籠→妻籠宿→妻籠バス停/奈良井駅→奈良井宿→鳥居峠登山口→木曾の大橋→奈良井駅	11/17: 歩行距離〜8km/累積標高差登り 250m/下り 300m, 歩行数〜17,000歩
	歩行/行動時間	歩行/行動時間	
ガイドブック	—	—	11/18: 歩行距離〜6km/累積標高差下り 150m/登り 30m 歩行数〜14,000歩
計画(行動時間)	〜6:10	妻籠宿 3:45+奈良井宿 2:26	
実行(歩行/行動)	歩行 2:58/行動 5:05	妻籠 1:55/3:37+奈良井 0:52/2:12	
コースタイム			
◆11/17(日) 天候: 終日晴(馬籠宿〜馬籠峠〜大妻籠ウォーキング)			
小田急線(集合 6:45) ひかり 501/しなの 5号 恵那バス@570 0:25 (見学) 0:03 昼食: 手打ち蕎麦 0:03			
本厚木==小田原==名古屋駅==JR 中津川駅==馬籠バス停——馬籠宿藤村記念館——高札場跡/恵盛庵——展望台——			
5:30-5:54 6:41/7:04 8:18/9:00 9:48/9:55 10:20/10:25 10:50/11:12 11:15/12:02 12:05/12:12			
0:28 (水車塚) 0:18 (トイレ休憩) 0:20 (801m) 0:19 (湯茶の接待)0:32 0:30			
——梨の木坂——十返舎一九狂歌碑——馬籠峠——一石栃立場茶屋——男滝・女滝——大妻籠つたむらや(泊) 夕食 18:00〜			
12:40/12:45 13:03/13:15 13:35 13:54/14:18 14:50/15:00 15:30 到着 就寝 21:00〜			
◆11/18(月) 天候: 晴 (大妻籠〜妻籠宿/奈良井宿内ウォーキング)			
朝食 7:00〜 0:26 1:06 (見学) 0:18 (昼食: 信州牛朴葉焼)0:05 バス¥300 各停列車 0:07			
大妻籠つたむらや——妻籠宿入口——資料館(脇本陣・資料館・本陣)——藤乙——妻籠バス停==南木曾駅==奈良井駅——			
7:58 8:24 9:30/10:45 11:03/11:30 11:35/11:54 12:03/12:19 13:24/13:33			
0:10 (見学) 0:10 0:15 0:05 (コヒ/五平餅) 0:05 各停列車			
二百地蔵/八幡神社——奈良井宿上間屋資料館——高札場跡・鎮神社——木曾の大橋——Café 深山——奈良井駅==			
13:40/13:50 14:00/14:20 14:30/14:35 14:50 14:55/15:40 15:45/16:06			
あずさ 28号 JR 横浜線			
塩尻駅==八王子駅==JR 町田駅(解散)			
16:30/16:38 18:30/18:37 19:07 到着			
コースの概要、特記事項、反省事項等			
◆ 計画立案の経緯: ゆった〜り山行の年間計画立案段階で、晩秋の紅葉を巡るビック山旅として、宮島弥山登山を中心とした山陽道の山旅と木曾路が挙がったが、宮島を支持する声が高く、一旦木曾路は来年回しにすることになった。しかし、宮島のシンボルである厳島神社の大鳥居が 2020 年の夏まで、百数十年ぶりの大修理に入り、この間足			

場が組まれて景観が損なわれることが判明したため、宮島を来年に延期し、木曾路をこの秋に実施する (2/4) 事が急遽決まり、慌てて計画を立案。最近の地球温暖化の影響で、紅葉の最盛期が段々後ずれしていることを考慮して、実施時期を従来の紅葉最盛期より約1週間遅い11/17-11/18で計画し、参加希望者を募ったところ、シニアマンバ6名と若手4名が手を挙げた。直前に1名のキャンセルがあり、最終的に9名により、全日秋晴れのもと、全山紅葉真っ盛りのジャストタイムに木曾路の山旅を堪能することができた。

◆11/17(日): 小田原駅 7:04 発のひかり 501 号に乗りして名古屋経由で、中央西線の中津川駅に向かう。日曜日早朝の小田急線下りダイヤは、平日に比べ接続が悪く、マイカーに乗り合わせたり、タクシーを利用したり、駅まで歩いたり、ベテラン揃いの皆さんだけあって、余裕をもって小田原駅に集合して戴き、最初の関門を無事クリア。新幹線の車窓からは、雲一つ無い快晴の空に新雪を戴いた富士山をゆっくり楽しむことができた。

名古屋駅で特急しなの5号に乗換え、中山道の木曾路11宿の西の玄関口中津川駅に予定時刻の9:48AMに到着。駅前から満員の路線バスに25分揺られ、10:20AMにウォーキングのスタートポイント馬籠バス停に無事到着した。

好天の日曜日とあって、馬籠宿は行き交う観光客で大賑わい。最初に、白木屋の名物おばさん手作りのくるみだれの五平餅(小判型ではなく、1串に3個の団子を刺した形で1串150円と安価)を味わう。

いきなり馬籠宿の玄関口に残る枡形に出会う。急傾斜の石畳が鍵型に曲り、シボルの水車を左手に眺めながら、大勢の観光客が行き交う旧中山道の石畳の急坂を登っていくと、土産物や食事処の看板を掲げた古風な造りの町並が約600m続き、町並は高札場跡で終わる。馬籠宿の中山道沿いの主要な建物は、明治28年(78棟焼失)と大正2年(72棟焼失)の2度の大火で殆ど焼失。江戸時代からの遺構は石畳と石垣のみで、現在の建物は、大正の大火以降に再建されたものだそうだが、往時の馬籠宿の雰囲気は十分に醸し出している。

次に訪れたのは、日本陣跡に立つ藤村記念館。明治から昭和18年に大磯で没するまで、ロマン主義詩人・自然主義作家の文豪として活躍した島崎藤村は、明治5年この馬籠宿の本陣・庄屋・問屋を代々勤める島崎家17代当主で国学者の島崎正樹の四男として生まれた。本人の遺志により、生まれ故郷のこの地に、藤村の愛蔵品や直筆原稿等約5000点を集めた記念館が1952年に開設された。敷地内には焼失を免れた祖父母の隠居所があり、藤村は8歳で東京の小学校に入学するまで、この隠居所で暮らしていたという。この記念館には、藤村並びに島崎家に関する膨大な資料が展示してあり、藤村の人となりや作品、兄が描いた絵画等の展示物を見て回った。明治維新前後の馬籠を舞台にした父正樹を主人公とする長編小説「夜明け前」や部落差別を描いた「破戒」、26歳で初めて出版した詩集「若菜集」に収められている有名な詩～まだあげ初めし前髪の/林檎のもとに見えしとき/前にさしたる花櫛の/花ある君と思ひけり～で始まる「初恋」、今も愛唱されている「千曲川旅情の歌」や「椰子の実」の作詞原稿など、興味深く見学して廻った。藤村はクリスチャンでありながら、女学校の教え子と同棲したり、血が繋がった姪に子を産ませたりと、私生活では相当人の倫に外れた振る舞いをしたようだ。ちなみに、初恋の詩に詠われたお相手の女性は、藤村が8歳まで住んでいた本陣右隣の脇本陣・造り酒屋大黒屋の同じ歳の幼なじみ大脇ゆふ(後に妻籠脇本陣奥谷林家に嫁ぐ)とされている。

真っ赤に色づいたモジがきれいな藤村記念館の中庭で一休みした後、宿場外れの高札場を見学し、筋向かいの本格手打ち蕎麦処「恵盛庵」に10分ほど並んで、今秋収穫の新蕎麦に舌鼓を打ち、早昼食とした。

昼食処から5分ほど登ると、東と南を石垣が積まれた展望台広場に到着する。この広場からは、今登ってきた馬籠宿が眼下に広がり、南東には、日本武尊が東征の帰途、伊那谷から山を越えて、美濃に向う際に、越えたとされる標高1569mの神坂峠から、右の恵那山の高みに向かって長大な尾根を伸ばし、なだらかで均整のとれた大きな山容を見せる標高2191mの名山「恵那山」にしばし魅入り、また、何度も構図を代え、あるいはマンバやモジを近景に入れて、恵那山の姿を写真に収めた。2003年5月にTTCで初めて恵那山に登った際も、神坂峠から残雪を踏みしめながら長大な尾根を辿って頂上に立ったことを鮮明に記憶している。

展望台から馬籠峠に向かうと、人通りが一気に減り、陽が射すホカホカ陽気の中、紅葉を愛でながらの穏やかな里山歩きを楽しみながらのウォーキングになった。計画より1時間ほど早いことから、梨の木坂の水車塚や十辺舎一九狂歌碑の四阿屋で、おやつを食べて一休みし、江戸時代築の有形文化財指定今井家住宅等、古い民家が立並ぶ峠集落を抜けると、県道が通り、茶店が1軒ある標高801mの馬籠峠に登り着いた。現在、馬籠峠は岐阜県と長野県を分ける県境になった。馬籠峠の南北に位置する馬籠と妻籠は、馬籠脇本陣大黒屋大脇家と馬籠宿脇本陣奥谷林家は前述したように姻戚関係にあり、また、藤村の母の実家は妻籠宿本陣等々、両宿の住民は昔から強い血縁・地縁で結ばれていたが、平成17年の大合併で、違う県に分れることになってしまった。ここに至るまでには歴史的にも地理的にも複雑な事情と経緯があるようだ。馬籠を含む神坂峠の西側の旧神坂村一帯は元々美濃国だったが、明治以後の行政区では長野県に編入されたという。その後、旧神坂村の大半が岐阜県中津川に編入され、馬籠と峠地区のみが、長野県山口村に編入されたという。全国規模で進められた平成の大合併において、長野県山口村の大半の住民は、経済的にも地理的にも結びつきの強い岐阜県中津川市への合併を望んだという。高校に通学するにも、最寄り駅の中津川駅からJR中央西線の列車に約1時間乗って、長野県木曾福島町に通わなければならない。また、買物も路線バスで約25分の距離にある中津川市内で済ませるなど、中津川市との結びつきが強かった。当時の田中長野県知事が岐阜県への越境合併に強硬に反対したが、住民の強い要望で、岐阜県中津川市への越境編入が実現した。

峠の県道を横切り、案内標識に従って旧中山道に入ると、鬱蒼と茂る木曾五木(檜、榎、ねずこ、あすなろ、高野槇)の自然林の中に石畳と土道のよく手入れされた緩い下り坂の旧街道が続く。要所々に設置されている熊除けの鐘を鳴らしながら約 20 分歩くと、開けた平地に建つ一石柵立場茶屋に到着する。馬籠宿と妻籠宿のほぼ中間地点に位置するこの場所には、中山道を旅する人々の休憩場所として、立場茶屋が置かれ、往時には 8 軒の茶屋が並んでいたという。現在、江戸中期に建てられた 1 軒が現存しており、真冬を除く週末を中心に、茶屋の建物を開放し、地元のボランティアの方によって、ハイカーに無料で湯茶の接待をしているという。早速我々も、土間の真ん中に設えられたテーブルの周りの切り株のいすに陣取り、持参のお茶菓子と煎れていただいた暖かいお茶で喉を潤しながら、ゆっくり休憩させてもらった。ボランティアのおじさんの言によれば、最近このコースを歩くのは、欧米人が～80%、日本人は～20%と、圧倒的に外国人が多くなったという。3、4 年前に英国 BBC-TV が、馬籠宿～妻籠宿の旧中山道ウォーキングコースを日本の素晴らしいサムライロードとし紹介して以来、欧州、米国、オーストラリア等からのハイキング客が激増しているという。馬籠宿内では、中国語も多く聞こえてきたが、馬籠峠を過ぎてリックを背負って歩いている外国人は、殆ど欧米人で、子供を背負った欧米人カップルも多く見かけた。日曜日の今日は、日本人と西欧人の比率は半々ぐらいと思われるが、これが平日になると、歩いている日本人は希で、殆ど欧米人だという。古い日本の宿場町の風情と、紅葉に彩られた里山の風景を愛で、緑豊かな森林の中を歩く旧中山道のハイキングは、サムライロードの愛称で呼ばれているように、外国人にとって、古の日本の風情と自然を体感できる魅力的な観光コースになっているようだ。

この茶屋の隣には、もう一つ歴史的に重要な史蹟「一石柵白木改番所跡」がある。現在は周囲に枝垂れ桜が植えられた原っぱで、旧跡の説明板が、往時の番屋の様子を解説しているのみである。江戸時代、木曾周辺の大木の森林は、尾張藩所領の御用林で、ここに多く自生する檜をはじめとする木曾五木は、尾張藩の許可無くして、一本、一枝たりとも伐採することが禁じられており、禁を破って伐採したことが発覚すると、白木一本で首一つ、一枝で腕一本の厳罰に処せられたという。この場所にあった尾張藩の番所は、尾張藩の許可を得て伐採されたことを示す焼印の有無を厳重にチェックして、盗伐された木材が運び出されないよう厳しく監視する役目を担っていたという。

旧中山道を妻籠宿に向かって更に下ってゆくと、やがて沢沿いの道となり、滝の音が響くようになると、男滝・女滝の名勝に到着する。男埴川の本流と支流が合流する場所に落差 20m ほどの 2 本の滝が並ぶように流れ落ちている。左側の豪壮な滝が男滝、少し細めで優雅に流れ落ちるのが女滝。吉川英治の「宮本武蔵」の中に、武蔵の修行場所として、木曾山中のこの滝が登場するという。

更に歩を進めて行くと、道の両側に、20～30 軒の古民家が点在する下り谷の集落を通過する。家の外観等から判断すると、半分は人が住んでいない寂れた集落のようだ。やがて、馬籠峠から妻籠に通ずる県道を横断して、西の山裾に続く小径を進むと、大妻籠の集落に入り、本日の宿、民宿つたむらやに 3:30pm 丁度にゴールイン。本日は、上り/下りとも標高差約 300m/歩行距離約 8km の行程を、ゆった～り山行にふさわしい、終始ゆっくりのんびりしたペースで歩いた。この結果として、正味歩行時間約 3 時間、行動時間約 5 時間、歩行数約 17000 歩をもって、計画より約 30 分前倒して、全員元気に宿泊先の大妻籠に到着できた。

宿泊先に選んだつたむらやの現在の建物は、明治中頃の火事で、隣の家共々全焼してしまったため、現在の建物を再建しておおよそ 120 年になるという。家の両サイドに防火壁の役割を持つ白壁の卯建、1 階より 2 階がせり出した出梁造りという、この地方特有の建築様式で建てられており、玄関の戸は屈んで出入りする潜り障子になっている。つたむらやを含む大妻籠集落の建物、並びに、明朝訪ねる妻籠宿の建物を合わせた 214 軒が国指定第 1 号の伝統的建造物として指定を受けており、地元南木曾町挙げての保存活動が続けられているという。なお、つたむらやは、古くは秋篠宮ご夫妻が、まだ学習院大学在学中に、所属していたサークルの仲間とともに宿泊された。最近では、日本 300 名山一筆書き登山挑戦中のプロアドベンチャーレーサー田陽希氏が、南木曾岳に登る際にこの民宿に宿泊するなど、妻籠宿周辺の民宿としては、かなり名の知られた存在である。

この日の宿泊者は、TTC9 人に、オーストラリアから来た女性 4 人と男性 1 人のグループ。TTC は 2 階の 5 部屋。オーストラリアのグループは 1 階。食事の内容は 2 食付 1 泊 8500 円の値段相応であったが、食卓に載った米飯、野菜類、信州サーモン、アマゴ、どぶろく、緑茶等、殆どが自家栽培・養殖・製造とのことだった。オミヤゲにと自家製の蜂蜜や緑茶を購入した女性メンバが多かったようだ。早々に風呂に入って汗を流し、6:00pm からの夕食を済ませたあと、男性と女性が別々の部屋に集って、9:00pm 頃までおしゃべりが弾んだが、今朝ほとんどのメンバが早朝 4:00am 頃から行動してきたこともあり、9:00 pm 過ぎには布団に入り、翌朝 6:00am 頃までぐっすり眠ったようだ。

◆11/18(月): 6 時起床/7 時朝食/8 時、つたむらやのご主人をお願いして、玄関前で全員集合の記念写真を撮影して出発。天気予報では、日中曇天で、午後 3 時頃から雨のはずだったが、朝から青空が広がり、紅葉した黄色の山肌朝日が当たって、一際色鮮やかに見える。大妻籠の集落を抜けて、男埴川沿いにつけられた旧中山道を下ってゆくと、中央アルプス南部の水を集めて流れ来る蘭川に出会う。蘭川に架かる妻籠大橋を渡った先の民家の庭先の茂みに立つ「橋場の道標」(中山道と飯田街道の追分を示す大きな石柱)を民家の住人に教えてもらって確認。更に蘭川左岸の美しいモジの歩道を進み、右手に妻籠宿第 3 駐車場をやり過ごし、伊那路に通じる国道 256 を横断した先に、蘭川の水を落として発電する妻籠水力発電所があった。妻籠宿の入口にこんな風情のない建物はそぐわないのに、と思いながら進むと、すぐその先には江戸時代の宿場町にタイムスリップしたような妻籠宿の見事な

景観が広がるのを見て、そんな思いも一瞬のうちに吹っ飛んでしまった。

(4/4)

延命地藏尊や野仏を見つけて手を合わせたり、内部を公開していた築 250 年超(1700 代中央建築)の木賃宿「上嵯峨屋」の内部を覗いたりしながら宿場内をぶらぶら歩きしていると、時刻が 9 時を指した。すると通りの店の戸が次々開きはじめた。早速、地元の老舗の和菓子処「澤田屋」(本店は村ごと岐阜県中津川市に越境合併した旧山口村にある)を見付け、店先の長いすに座ったりして名物の栗きんとんを早速味わった。栗きんとんは中津川を中心とするこの地方一番の名物菓子で、新栗が採れる秋～冬のこの時期にしか味わえないレアもの的高级和菓子だが、昨日の馬籠宿では、人が多く、先を急いだ事もあって、味わう機会を作れなかった。また、栗きんとんのパリエーションとして、飯田名物の高級干し柿「市田柿」の中に栗きんとんを入れた新発売の和菓子にも食指が動き、もう一つ味見をするムバも多かった。また、娘さんに頼まれた方や家族にオミヤゲとして購入されたムバも多かったようだ。

宿場のほぼ中央に残る枳形跡を過ぎた先に、妻籠宿の歴史を学ぶに最適な南木曾町博物館として、有料公開されている脇本陣奥谷林家や資料館、再建された本陣を見学した。現存する脇本陣奥谷林家の建物は、明治維新によって、尾張藩による木曾五木の伐採厳禁の縛りがなくなった明治 10 年に、総檜造の豪勢な建物として立て直された築約 140 年の建物で、林家から南木曾町に寄贈され、現在町が管理する博物館として公開されている。囲炉裏端に座って、土間の方を見上げると格子窓から、太陽の光が筋状に差し込み、実に幻想的な景観だ。この光射す景観は大変有名で、昨日はどこやらの 3 社の TV 局が撮影にきたという。我々も体験した光射す幻想的な光景をこの文章で正確に表現するのは困難なので、別途 HP に公開する写真アルバムを見て感じていただきたい。

以下は、名調子で説明してくれた南木曾町観光課の女性が「僕」さん受け売り話と南木曾町発行の資料から少々・

藤村の幼なじみ大脇ゆふが嫁いだ脇本陣奥谷林家は、副業として造り酒屋をしていたため、明治維新によって、宿場町制度が廃止され、幕府による手当てが途絶えた多くの本陣が没落して行った明治 10 年においても、経済的に裕福な暮らしができ、このような豪勢な建物も建築できたという。その後、中山道沿いに鉄道を通す計画が持ち上がった際、妻籠と馬籠は大反対したため、鉄道も国道 19 号線も、両宿を迂回して、木曾川に沿って建設された。幹線交通網から取り残された両宿は、急速に衰退したまま、昭和 40 年代のバブル景気の時代を迎えた。

妻籠宿内の多くの建物は、馬籠宿のように大火に遭う事もなかったため、江戸期～明治初期に建てられた建物の大半が、そのまま残っていた。昭和 42 年に地元有志らによって、妻籠集落保存の構想が話し合われ、翌年には、妻籠地区全住民を会員とする組織「妻籠を愛する会」が結成され、その中で、「売らない/貸さない/壊さない」の 3 原則を申し合わせた。そして、昭和 43 年には長野県の明治百年記念事業として妻籠宿保存事業を 3 年計画で実施する事が決定された。

宿内の表通りからの電柱撤去、200 棟に及ぶ古民家の修理保存工事等が進められるなど、住民・行政・学者が協力して、全国に先駆けての保存事業がなされた。その後、妻籠・馬籠宿の観光化が進み、外部資本の参入や、築き上げてきた景観破壊の恐れが高くなってきたため、当初の理念と方針を守るものとして、「妻籠を守る住民憲章」が定められ、住民自らが厳しい規制を設け、看板の乱立や行き過ぎた商業化を防いできている。昭和 50 年文化財保護法が改正され、古い集落や町並が「重要伝統的建造物群」として国の文化財に指定・位置づけられ、妻籠・大妻籠地区の建物・町並が、その第一号として指定された。その後、妻籠地区の保全事業をモデルケースとして、全国各地で、宿場や古い町並の整備・保全事業が続いているという。

さて、再建された本陣や高札場跡等の宿場の主立った史蹟を見学し終わったのが 11:00am。バスの乗車時間まで 50 分あることから、急遽、旅館藤乙の食事処で、美味しいと評判の高い信州牛の朴葉焼きステーキを食べることにした。昼食時間帯であれば順番待ち必須であるが、時間が早かったため、我々が本日の口開け客のようで、ゆったり美味しく信州牛を味わい、満腹・満足して、南木曾駅から中央西線各停列車に乗車し、奈良井宿に向かった。

木曾谷を北上する列車の車窓からは、花崗岩の大岩を縫って流れる木曾川の清流と、山肌が黄色に彩られた紅葉の景色を存分に堪能できた。太陽の光が射して、一段と色鮮やかな黄金色に輝く森は、丁度紅葉の最盛期を迎えたカラマツ林のようだ。1 時間余りの列車の旅を終え、最後の訪問先奈良井駅に降り立った。奈良井宿の滞在時間はおよそ 2 時間半と少々短い。先ず近くの二百地蔵にお参りしてから、資料館となっている上問屋(宿場の伝馬や人足の手配・管理する役所)を見学して、奈良井宿の歴史を学んだ。奈良井宿は奈良井千軒と言われるほど、木曾 11 宿では勿論、中山道 67 宿の中でも屈指の大宿で、中山道 3 大難所の一つである鳥居峠の京口登山口にあたる鎮神社までの約 1km に渡って人家が立並んでおり、宿内には、妻籠同様往時の古い建造物が多く残り、重要伝統的建造物保存地区に指定されている。宿内の枳形遺構や特産品の木曾漆器や曲物、木工品等を販売するお店を覗いたりしながら 1km の宿内を一通り歩いた。木曾漆器のお椀を購入希望のムバのために、グレードと値段について聞いてみた。生地加工・漆塗り・仕上げ加工すべてが外国(中国/東南アジア)の場合が輸入品表示で価格は～¥1000、生地を輸入し、以降は木曾で仕上げたものが、国内加工品(¥2000～3000)、すべての加工を国内で行った製品のみ国内産と表示(¥3000～5000)。家庭で普段使いするのであれば輸入品で十分との答えだった。ムバから休憩したい、コヒが飲みたい、五平餅が食べたいとのオーダーが出た。当初お休み処として考えていた築 200 年の徳利屋が休みだったため、少し雰囲気の良い Cafe 深山に案内し、近くの奈良井宿市場のご主人にお願いして、五平餅を出前してもらうことで、何とかムバのニーズに応えることが出来た。7:00pm 頃 JR 町田駅に無事帰着・解散した。